

# 目次

「文理戦争」	P2
「無題」	P5
「月」	Р6
「日」	Ρ7
「空」	Р8
「休み」	Р9
「人形」	P10
「氷」	P11
「いちご」	P13
「無駄」	P14
書き出し指定の物語	
NO. 1 ~10 ·····	P16
なろう小説のすすめ	P32
おすすめの本紹介	P37

### 文理戦争

文系と理系 それは大学受験や進路選択における分野の区別。

しかし、人々にそう認識されていたのは遥か昔の、まだ人類が理系と文系に別れて戦う前の話であった。

「…やはり、ここら一体は文軍の秘密基地だったようです。でも規模が小さい。言葉通りの子供の遊び場程度だったようですね」

そう呟きながら私は湿った土に少し錆びついたクラシックバイクを停める。

片付けが面倒だったのだろうか、テントの一部や消耗品が辺り一面に散らばっている。

そこから視線を手元の地図に戻し、赤色のペンで円を書いた。

赤色は文系の印。青色は理系の印。

地図の7割は赤色で埋まっており、文系の人間が多いことを示している。

ペンと地図をポケットに入れ、バイクに跨ると再びエンジンを掛ける。

薄っすらと漂う排気の匂いには慣れたものだ。歯切れのいいエンジンサウンドが静かな空間を揺らす。

男にしては少し長い髪を風になびかせ、メーターをカタカタ言わせながらおんぼろバイクは進んでいった。

\_\_私は、戦地から免れることができた英語圏育ちの子孫。一族は両軍の領地ではない森でひっそりと生き長らえてきたが、理軍の襲撃によって家族は散り散りに。今も家族の居場所は不明だが、私はこの戦争を終わらせるためにこうやって活動を行っている

「しかし、最近はやけに文系の活動が活発ですね。…何かあるのでしょうか」

マフラーに隠れた首を縮め、バイザーの奥で眉を潜める。

すると突然ちかり、と一筋の光が私の瞳に降り注いだ。

空を見上げると、真っ黒な夜空の彼方に、寡黙な朧月がぽつんと佇んでいた。

「…そろそろ休んだほうが良さそうです。」

視線を前に向け、スピードを落とそうとした瞬間

「 ッ! しまった!」

がしゃぁんと音を立ててヘルメットのシールドベースがやられた。

火花が散り、バイクが右に傾く。

頭の左側、あと数センチ違えばどうなっていたかわからない。

咄嗟にフロントブレーキをかけ、車体が前のめりになった瞬間に右に転がる。

腰のホルスターからハンドガンを瞬時に取り出しグリップを手のひらで包み、敵を照準する。

ぎりりとトリガーが軋む音がする。その直後、ハンマーが撃針を叩き『英単語ターゲット 1900』が発射された。スライドの上のセレクターをフルオートポジションに変更しフルオートで撃つ。『システム英単語』『LEAP』『DUO3.0』 どれも有名な武器だ。

それに対し相手はどう動くのか

きん、と甲高い音がなった。何だ?金属製のなにかが私の弾を弾いた。

「…鬱陶しいですね。そろそろ姿を見せてください。私も&ulletを温存しておきたいのです!」

ちかりと金属が反射する。月光だと思っていたのはこの光だったのでしょうか。

すると向こうの、赤い対実弾銃複合アーマーを身に纏った兵士が私に対し攻撃を始めた。

ごん、と鈍い音を立てて重い何かが足元付近に落ちた。乾いた土に亀裂が入り、地面が揺れる。

…鈍器か?そんな重い物、どうやって

落下物に目をやると、少し掠れた字で『広辞苑』と書いてあった。

これはまずい、と思ったのも束の間。すぐに『明鏡国語辞典』が飛んできた。

電子化が進んでいる中でわざと重たい武器を使用してくるとは小賢しいものだ。

後方へ退き、胸元のポーチから弾薬を取り出す。急いでそれをマガジンに収め、スライドを引いて薬室に弾薬を送り込む。使用する弾は『Iongman dictionarn of contemporarn english』相手の弾と比較すれば絶対的な威力では 劣り知名度も低いが、英語を調べるための辞書なのに英語で記載されていることから人々に恐れられてきた。

発射準備が完了し再び赤アーマーに照準を合わせ、半ば自動的に右手の人差し指がトリガーを絞った。

撃った反動が手から身体に伝わる。相変わらず慣れない感覚に吐息が凍えるような冷気となって肌を撫でる。

銃口から飛び出た弾は、風を切ってまっすぐ進んで行き\_\_\_\_\_

見事な放物線を描いて地面に叩きつけられたのだった。

「陣営の近くで騒ぎがあると言うから来てみたものの、ただの文軍のいじめ現場だったようですね」

青色の旗が夜風に揺れ、私と文軍に衝撃をもたらす。

暗記している訳ではありませんが、たしかに理軍の陣営が近かった気がします。

不覚ですが…それは文軍も同じようですね。

先程まで敵対していた文軍が理軍に対し焦りを見せたような声音で言った。

「こいつはそっち側の兵士じゃないのか?」

「違いますよ。夜に一人で見回りなんて効率が悪い。野蛮な文軍と違ってこちらは慎重に、だけど時間をかけずに 最適解を選んでいるのですから」

理軍のリーダーと思われる人物は、格下を相手に心底嫌だと言った表情で見下す。

威圧的な空気の中、バレないだろうと思い私は一歩ずつ倒れているバイクの方へ向かう。

緊張と動揺で視界が揺らぐ。息を吸う。吐き出す。もう一度吸い ぐっ、と止める。

小刻みに震える手がハンドルに触れようとした瞬間

毎秒2mで動く点Pが、ホルスターに収めていたハンドガンをきれいに撃ち抜いた。

ぐんっ、と何かに引っ張られたかのように美しく直角に曲がり、理軍の懐へ返った。

「勝手に逃げるのは容赦しない。…難易度をあげようか」

その直後、2つのピンポン玉が理軍から放たれた。

左右一個ずつ、先程と同じように直角に曲がってこちらへむかってくるのは

……毎秒2mで動く点 Pと毎秒3mで動く点 Q!

左から飛んできた点 Q を素早く交わし、直後に点 P も躱す。

「慎重にとか言ってたくせにガラ空きだぞ…」

文軍のリーダーは息を吸うと、数々の人間を睡眠へと引き込んできた悪魔の文章\_\_\_

『なんじはその弱者を攻めむとする利己やうなる行ひを面無がらずや』

日本語なのに解読できない、文章が頭の中をぐるぐる巡っている。

体全体が重くなって立って入られず、片膝を立ててしゃがむ。

その間も理軍が『双曲線』を放ち、一方の文軍は『指示語』を使って反撃する。

「まずい…このままじゃどちらかに捕まってしまう…。そうなったら休戦なんて夢のまた夢だ…」

そもそも、どうして争わなければならないのだろうか。

太古の理系や文系が我々一族の母国語、英語を毛嫌いしていたのは歴史書で知った。

嫌いと言う気持ちはわかる。私も数学が大嫌いでした。

しかし、苦手だから嫌だからと言って逃げてもその真髄には気付けない。

私は、何千年も前から愛されてきた『数』と『言葉』に敬意を表したい。

だから\_\_\_\_

「今は、discussionが必要です!」

投擲用ナイフの『Sunshine』と『NEW CROWN』を両手に持ち、両軍のギリギリまで近づく。

と言ってもあくまで護身用であり、初心者向けといったところだろうか。

それに、私は攻撃をするつもりはありません!

もはや私など目にとめていなかったであろう両軍との距離が凄まじいスピードで縮んでいく。

知覚が加速され、徐々に時間の流れがゆるくなるような感覚を味わう。

ر! ا

理軍の胸元までぐっと近寄り、武器破壊を狙おうと相手の手元に視線をやる。近づきすぎて息を張り詰めた音で さえも聞こえた。

『累乗』

糸に引っ張られるかのごとく、私は後方へ押された。

累乗 同じ数を何回も繰り返しかけ算したもの

つまり、理軍は私と彼の間の距離を数回かけたのだ。

「…離されても近づくだけです!」

「か…『階乗』! n=10!」

まずい!そんな膨大な数を受けてしまったら脳がオーバーヒートを起こしてしまう。

だけど階乗は式が長い!今、この瞬間がチャンスだ!

『接続詞』で間合いを詰めていく。『in addition』で空中へ大きく跳躍すると

ナイフを捨て、右手の拳で原級『big』、左手の拳で比較級 bigger』

そしてとどめの最上級『biggest』手を組んで頭を上から下へ、宙を舞っている身体の重量すべてを込めて叩き 込んだ。

そしてそれは、彼が 3628800 という凄まじい数を生み出そうとする直前だった\_\_\_\_

着地し、姿勢を 180 度変え文軍の赤アーマー男に意識を変える。

『be 動詞』を7発、銃に装填しフルオートで撃つ。

簡単な問題にこそ足元を掬われる時がある。

そのまま距離を詰めていくと、

「直喩 その攻撃は、まるで私に効かなかった」

「なっ…たった一言で…!」

アーマー男の剣を銃弾で手元から弾き飛ばそうとしたが、見事に跳ね飛ばされた。

直後、前方から『レ点』が飛んでくる。

あれにあたると攻撃を読まれるだけじゃなく逆にこちらへ返してくる恐ろしい攻撃だ。特に『一二点』や『上下点』と 混ざってくると大変なことになる。

顔を右に傾け、先程と同じようにギリギリまで近づく。

「\_\_\_\_!み…三つの選択肢の中から\_\_\_\_」

そう呟いた瞬間、私は右手を副詞『quite』で強化した。

踏み込むと同時に、右拳を低く滑らせた。

ر ا د۰۰۰۰۰

『助動詞』の might は 50%の確率で相手に二倍のダメージを与える。

拳が沈み込む感触とともに、相手の身体がくの字に折れた。

その一撃に、刃はない。ただ確かな痛みと、呼吸を奪う力だけがあった。

当たった\_\_\_\_二分の一を当てる事ができた。

文軍もやられ、理軍と同じように地面に転がる。

「…とどめは刺さないのですか?」

理軍のリーダーは枯れた声音でそう問う。

「当たり前です。私はあなた方をdenialしたい訳ではないのですから」

私の発言に文軍は眉をひそめる。

「そもそも、お前は一体何者なんだ?英語の民は大昔に絶えたと記憶しているが」

「えぇ。私はその子孫です。文系にも理系にも属さない英語は人口が少なく、争いから逃れるのに必死でした。…きっと英語を使う者なんてこの世界では私ぐらいでしょう」

「では…あなたは何故戦ったのです?何か目的があるのでしょう」

理軍の言葉に私は頷く。

「はい。私は\_\_この争いをなくすために、提案をしに来ました。そのために武力を使ってしまい…申し訳ありません。 ですがこうでもしないと話を聞いてくれないと思ったのです」

「…文理戦争を終わらせる…か。考えたこともなかったな」

「この争いは我々の先祖が互いに対する憎しみ、焦りが募った結果なのです。

文明が高度に発展し、教科を具現化できる技術が確立した瞬間、文系と理系は対立しそれぞれの理念を掲げて戦いを始めました。

…一度だけで良いからもう一度向き合って欲しいのです。数学の美しさ、国語の美しさに。胸の奥に秘めていた 謎、興味、発見をもう一度心の中で彷彿させて見つめ直してほしい\_\_\_\_\_それが、私の願いです」 私の願いは、乾いた風に乗って荒れ果てた大地に消えていった。

それでも、どこか遠くで微かに木霊した気がした。

# 無題

みんなが僕を見ている。どんなときも見ている。遊んでいるときも、仕事をしているときも、家族や恋人と話しているときも、みんなどんなときも僕を気にして生きている。見られている気分は悪いものじゃない。注目されているみたいでドキドキするし、みんなが僕を気にしているのも、僕がみんなを操っているみたいで面白い。だけど最近、みんな僕を気にしすぎだと思うようになってきた。だって、どんなときも僕を基準にして生きているんだよ。そう思ってしまうのも仕方ないと思うね。家に帰るのも、寝るのも、起きるのも、全部僕を基準にしている。まぁ、基準にするだけなら昔からそうだったんだけど今は細かいことまで僕を基準にしている。昔の人たちはこんなに僕を見ていたり、基準にしていなかったと思う。僕自体はその時から存在していたけど、こんなに見られてはいなかった。やっぱり今の人たちは僕を気にしすぎだと思う。これだけ注目されたり、基準にされたりすると、たまに僕がいつもより速く進んだり、ちょっと止まってみたり、戻ったりしてみたらどうなるのか試してみたくなってしまう。まぁそんなことは絶対にできないんだけどね。僕は決められたとおりに進むことしかできないから。はるか昔に僕が時間と名付けられてから、ずっと進んできたし、いろんなことを見てきた。どれだけ進んだかなんて覚えていないし、どんなことがあったかもあんまり覚えていない。だけど、みんなは僕を気にしながら生きてくれている。おかげであんまり寂しくはないし、少し楽しかったりもする。だから僕は今日も決められたとおりに進む。| 秒 | 秒しっかりと。



月が綺麗だった。

あなたなら、こう聞いてどんな月が思い浮かぶ?

明るい満月か。それとも、曇った半月だろうか。

だが私の見た月は、そのどちらでもなかった。例えるならそう、ほとんど沈みかけた夕陽のような、とても薄い繊月であった。

ほとんど沈みかけた夕陽。

そんな表現がでたように、私が見たその月は、薄っすらと赤みがかっていた。

その惹きつけるような赤に、得も言われぬ格好の良さを感じた私は、自分が何をしていたかも忘れ、つい魅入って しまった。見蕩れていればいるほど、その月は美しさを増すように思えた。

私はこれまで、月といえば満月こそが最も素晴らしいのだと思っていた。満月といっても、いろんなものがある。空の晴れた時、高く濃い藍を燦々と照らすもの、雨上がりの、少しぼやけて鈍く光るものなど、どれも筆舌に尽くしがたい美しさである。

だが、そんな固定観念は、その日見た月によって見事に打ち砕かれてしまった。

繊月。別名二日月といって、三日月の前に昇るとても細い月。なんと美しい名だろうか。

三日月には及ばず、かといって新月のように暗いわけでもない。ただ一筋ほどの細さで光る、とても繊細な月。だというのに、私が見たそれは、とても力強く感じた。

その夜は、とても綺麗に晴れていた。

星が点々と見えていて、どれも確かに光っていた。

だが、あまりにも美しい月の輝きに目を奪われ、どれも目に入ることがなかった。異様な存在感を放っていたその月は、なにも強く光っていたわけではない。ただその輝きに、他と違う荘厳さがあっただけなのだ。それなのに、その月は今まで見てきたどんなものより美しく、そして輝いて見えた。

今でも、鮮明に思い出せる。

白と金、そして黄色を混ぜた光が、重々しくも鮮やかな赫に縁取られていた。そんな光が、繊月というとても細い月から放たれていたのだ。見蕩れないわけがない。

もう、二度と見ることは出来ないのだろうか。そう思いながらも、私に強烈な感動を与えたその月に、焦がれずにはいられなかった。

#### コメント

とても綺麗な月だったので、書くことにしました。たしか、4 月の終わり頃だったと思って調べると、29 日にでた月でした。繊月は、別名二日月、もしくは既朔(きさく)と呼ばれるそうです。

薄く、しかし鮮やかな赤みがかかった格好いい月だったので、もう一度見てみたいです。



朝が眩しい。

目も眩むような陽が、青青とした空が、滲み出たような雲が、その全てが美しい。

朝が来ると、いつもそう思う。

美しいものは、とても眩しく見える。

この泥底の身との対比で、爛々と輝いて見える。

いつからだっただろう。外に出なくなったのは。

子供の頃は、いつも空の下で遊び回っていたものだ。

それが、いつしか変わってしまった。

なにか物理的でない扉を隔て、外界から完全に隔離されてしまったのだ。

いつか夢見た永遠が、こんな形で叶うとは。

暗室の中、胎児のようにうずくまった姿は、さぞ滑稽なのだろう。

私は闇だ。綺麗で眩しい人々の陰だ。

壁からは、針の穴ほどの光が差している。

差し込む陽の光だけが、この部屋の光であった。

綺麗だ…。

こんな私になっても、まだ美しいと思える光は、とても眩しかった。

壁から差し込む光は、隔てられた者にも平等だ。

皆等しく照らされることしかできない。

残酷なほどに温かく、そして何よりも眩しい。

私はただ、それを感じているだけだった。

たった指輪ほどの陽光に顔を当てると、頬から温かな熱が伝わってくる。

そこには、水に反射した光が小さく光っていた。

…どれくらい、時が経っただろうか。

涙は枯れ、溶け出した藍が床に染みていた。

ひどく冷静だ。なにも煩わしく感じない。

そしてなにも見えない。唯一、今が朝で無いことは分かる。光がない。途端、暗い感情が滲む。

暗い。寂しい。怖い。

灯りのない部屋は、こんなにも恐ろしいのか。

だれか、助けて。だれか、だれかだれか。

嗚咽が漏れる。声にならない声を発し、暗い部屋を見回す。

視界の端に映った、灯りがなく反射しないはずの鏡には、孤独な陰が蠢いていた。

いやだ。いやだいやだいやだ。恐い。

助けて。だれか、私を助けてくれ――――

.....

夜に囚われた私が、また視える。

生気のない、虚ろに落ち込んだ眼をしている。

夢の私は、そのままじんわり滲んでいって、やがて陰に消えた。また、1日が始まる。

夜は恐い。私はずっと囚われたままだ。 それでも、朝の光が私を癒してくれる。 瞼を開くと、眩しい光が差し込んでいた。

#### コメント

なんかアドリブで書いてたらできてました。

あなたはこれを読んで、何が浮かびましたか?

特に構成も内容も考えてないので、好きに考えてみて下さい。主は、なぜか段ボールに嵌る人が思い浮かびました。

いつの間にか今日が昨日になって、明日もすぐに昨日になって、そうやって | 年が過ぎてます。

なんにも残ってません。

でもそれって、とても寂しいですよね。

# 垄

学校からの帰り道

夏の匂いがした

夏が近づいているのだなと感じた。

坂の中板にさしかかると、花がうえてある。スズランやアジサイなどが

色とりどりにさいている。道の脇にも目をやると、雑草も生えていた。

雑草といえども立派な花だ、というようにツユクサがとてもきれいに咲いている。

花が好きな母にも見せてあげようと思って。

一つプチッと摘み取った

これをみて母は夏が近づいていると気づいてくれるだろうか、いや、もう気づいているかもしれない。

そんな母との会話を想像しながら歩いていると

ふわっと風が私の髪を靡かせた

風に煽られ空を見上げると母が好きだった色に染まった夕日が輝いていた。

母にも見せようと急いでスマホをポケットから取り出した。そして一枚パシャリ。

写真を確認しようとした。

だけどぼやけて何もみえない。

ポトリ、スマホの上に一粒おちた。

それから溢れ出て止まらないものを拭いながら家に入り、ずっと握っていた花を仏壇にそえた。



朝ご飯を食べた。

パンにジャムを塗って、牛乳と一緒に頂いた。 いつも通りの朝食だった。特に感想はない。 それから、外に行った。川まで歩いて、土手に寝転んだ。 見上げると、澄んだ空が目に映った。

#### 空が綺麗だ。

確かに綺麗なのだけれど、どこか寂しい。 それは水色のついた水のようで、けれど、藍を薄めたようでもあった。 薄まった藍は、雲がないからか、やけに哀しく見えた。

今日は、休日である。

だからこそなのか、周りはとても静かだ。

車の走る音、風がそよぐ音、川が流れる音も、どんな音だって聴こえる。

だというのに、とても静かだと感じる。

なぜだろう。皆遠いわけでもないのに。

いろんな音があって、でもそれは、確かに静寂だと感じた。

ところが、いくら耳を傾けても、唯一人の話し声だけは、聴こえることがなかった。

お腹が鳴ったから、昼食を摂ることにした。本日のメニューは、サンドイッチである。

そのままもぐもぐと食べ始める。多分、おいしい。

けれど、それ自体に特筆すべきものは見当たらなかった。

トマトの酸味が一人歩きをしていて、少し酸っぱかったことくらいだろう。

昼食を終えると、また土手に寝転ぶ。草の触感が、なんとも心地いい。

陽が暖かく、うとうとと微睡んだ。全身を広げて目を閉じると、草のベッドが優しく支えてくれるのを感じる。 たくさんの草が生えているのに、そこに人間は一人だった。

目が覚めると、もう夕暮れであった。近くの家からだろう、魚の焼ける匂いがしてくる。

さらに嗅覚に委ねてみれば、シチューの匂い、カレーの香りがしてきて、どこも夕飯を作っているのがわかる。 そうして帰路に着き、家の前に立った。けれども、ひとり暮らしの家からは、やはり夕飯の香りがすることはなかった。

一人でいるのは好きだ。一人でいると、心が休まるから。でも、独りでいることを望んだわけじゃない。 そうしてまたひとり、ベッドに横になった。

#### コメント

詩っぽく書いてみました。とても短く済んで、少し驚いています。

この話は、五感に絡めて書いてみたのですが、表現を考えるのが難しかったです。

ところで、先ほど「詩っぽく」を変換しようとしたら、「卓袱」という漢字が出ました。

変換候補には、卓袱料理や卓袱うどんなど、興味深い単語が並んでいて、それがここ最近の発見の一つです。

# 人形

気がついたら私は、何も感じなくなっていた。

家族や友達は、私が好きだったものや嫌いだったものを持ってきては私に見せた。

私が反応するのではないかという淡い期待を抱いて。

でも私は何も感じることができなかった。

いつも「そうなんだ」と返すだけ。

その度みんなは傷ついたような顔をして帰っていく。

その姿に傷つくはずなのに、私は何も感じない。

そんなある日、教室に忘れ物をしたので取りに帰ると、教室から友達の声がした。

「やっぱりもとに戻らないね~」

「もとのあの子に戻って欲しいんだけどな…」

その声を聞いて気付いた。

みんなは今の私を望んでいない。

今の私はいらない。

そっとその場を後にしようとすると、気配を察したのか、はっと友達の一人がこっちを向いた。

次の日、私は飛び切りの笑顔で教室内に入っていった。 みんなは、やった!もとに戻った!などと騒いでいた。

ただ一人、昨日、振り返ってきた友達を除いて。

大丈夫、ちゃんと笑えているはず。 みんなの期待に答えられているはず。

なのに君は、どうしてそんなに苦しそうな顔をするの?



「OOさん、ここ教えてもらってもいいかな?授業だけだと分からなくて...」

「OOさん、ちょっとこっちに来て手伝ってもらえる?思っていたよりも重くて」

「〇〇さん、この前の作文入賞したんだって!?すごいね!!」

「うん、いいよ!でも先生に呼ばれてるからちょっとまってね」 「わかりました!全然いいですよ先生。困ったときはお互い様ですから」 「そんなことないよ!今回はたまたま運が良かっただけだよ」

私はすべての声掛けに答えながら、完璧な笑顔を貼り付けた。 心に冷たい、大きな氷を抱えて。

でも私は、その氷を見て見ぬふりをした。これは今の私には必要ない、と みんなは、完璧な私を必要としている。こんな欠陥のある私は必要ない。 母も、素直で、従順な私を必要としている。 それが私のためだと思って信じている。 母たちの期待に答えなければならない。 今、私には勉強以外必要なものはない。

でも、なぜだろう。

母は、私に愛情を持って、私のためにそう言ってくれている。 そう思うのに...

なぜだろう。

母の言葉を聞くと、私の中の氷が大きくなっていく気がする。

本当にその言葉は、私の事を見て言ってくれているの?

そんな事を考えながら過ごしていたある日、授業で「将来の夢」をテーマに作文を書くことになった。 そこで私は気づいた。

わたしは一体何になりたいのだろう。 わたしは一体何をしたいのだろう。 わたしは一体何が好きなんだろう。

わたしって何なんだろう

いつも私は、周りから必要以上に求められていた。周りには彼らなりの私の像があった。 私は彼らの期待に応えたくて、笑顔になってほしくて。 なにより、母の悲しんでいる顔を見たくなくて、私は必死に演じていた。 それでいいと思っていた。それが私が望んでいることだと思っていた。 なぜだろう。 わたしのことが、わからない。 どうすれば、私について知ることができるだろう。

その日の作文は、母が望んでいた「教師」をテーマに書き、なんとか乗り切った。 それから私は、わたしの本当の思いを見つけるために、様々なことに触れ始めた。 母が私が勉強していないと知ると悲しむと思ったから、ばれないよう、母たちが寝静まってから試した。

でも、私の氷を溶かしてくれるなにかを探し出すことが、できなかった。

私の心は冷たいまま。この先一生わたしは表に出ることができないのだろうか。 一生、みんなの私で生きていくのだろうか。

それでも諦めきれず、周りが感動したと言っていた映画や曲を聴き漁った。 でも、心は冷たいまま。 わたしはもう戻ってこないのだろうか。

深くため息をつき、目を瞑ると窓の向こう側からかすかに音が聞こえてきた。 何だと思い、閉じていたカーテンを少し開くと、隣の家の、同い年くらいの子が苦しそうな顔でギターを弾いていた。

その曲には、彼女の葛藤が顕著に現れていた。

苦しいはずなのに、何故か温かい。 ずっとこのまま、聴いていたい。 母とは違い、歌声に、温かさがこもっている。

私の中の氷が、カランと音を立てた。

### いちご

私は恋がわからない。

恋愛的な好きという感情がわからない。

今はまだいいかという気持ちと、果たして今後誰かを好きになることができるのかという気持ちが交差する。

周りの友達からは甘酸っぱい可愛らしい曲が聴こえてくるのに、私から流れたことはない。

少し、自分は普通なのかと不安になったりする。

そんな事を考えながら迎えた高校2年生。

ある程度新しいクラスにも慣れ、友達ができ、落ち着いてきた頃。

初めての席替えが行われた。

そこで、初めて同じクラスになった男子と前後の席になった。

いつも部活のライブを観に来てくれる、部活の男子の友達ということだけ知っていた。

ただ、それだけ。それだけのはずだった。

彼が気さくだったこともあり、すぐに仲良くなった。

その席で過ごすようになり、彼についてたくさん知った。

責任感があり、誰にでも分け隔てなく優しい。

少しめんどくさがりだが、みんなのために大変な作業をしてくれる。

バイトが忙しく、授業中たまにこくりこくりとしている。

委員会やバイトで疲れているはずなのに、快く相談や遊ぶ約束、仕事を引き受けてくれる。

いつも笑顔がかわいく、周りを癒やしてくれる人。

そんな彼を見ていたら、私も元気になる。

SNS に彼からいいねが付くと、嬉しくなる。

話しかけてくれると、自然と笑顔になっていく。

他のクラスの子と話しているのを見ると、チクッと胸が痛くなった。

なんで胸が傷んでいるのだろう?

彼は私にとって仲の良い友達のはず。

なのにどうしてだろう。

彼を見ると、トクンと音を立てる。

他の子といるのを見ると、胸がキュッとなる。

これが恋なのだろうか。

もしかして私は、彼に恋愛感情を持っているのだろうか。そう自覚すると、かぁぁっと熱くなった。

そこで気付いた。

私、今度彼と遊ぶ約束をしていなかったっけ!?何も準備をしていない!やばい!

急いでお菓子などを用意しに行く。バタバタ準備をしているこの時間も、恋を自覚すると楽しく感じる。 そんな私からも、完熟のいちごのような曲が流れていた。

# 無駄

僕は小さい頃から囲碁が好きだった。

勉強を少しサボってでも友達と来る日も来る日も囲碁をした。

中学生になったある日僕たちは親に、

「囲碁をする時間があるなら、勉強をしろ」と言われた。

僕たちは、「どうして?」と聞き返した。すると、

「無駄だからよ。将来の何の為にもならないの。勉強は将来のため、自分のなりたいものになるために必要なものだから囲碁は必要ない。」

と、怒って碁盤を取り上げてしまった。

その後に、こう付け加えた。

「囲碁のプロになるなら話は別よ。でもあなたはプロにはならないでしょう?」

僕たちは、うなずいた

確かに、僕たちはプロにはならない。

僕は医者で、彼は大工を目指しているからだ。

でも、囲碁が無駄だという言葉には今ひとつピンとこなかった。しかし、囲碁を取り上げられてしまった手前取り戻す事は容易ではないと悟っていた。そこで僕たちは親に成績が学校トップ3に入っている間は囲碁を返してもらえないかと交渉した。

結果はイエスだ。こうして僕たちは高校を終えるまで囲碁を続けてきた。親はたまにその様子を見て、「また無駄なことを」とこぼしていたが、約束の手前、口出しはしてこなかった。

大学からは晴れて自由な身なので、もちろん囲碁で遊び続けた。医者になってから、今もなお囲碁を続けて無駄なことなどなかったと僕は思う。

なぜなら囲碁のおかげで友人や医者同士の遊びに入れるからだ。

医者界で、囲碁はあるあるな遊びらしい。

よく囲碁ができる人たちで集まりコミュニケーションをとる。

だから、僕にとっては人と付き合っていくには必要な手段だったのだ。

そう気づいたとき、一度友人にも尋ねてみた

囲碁は何かの役に立っているかい?と、

しかし、どうやら大工の仕事に就いてからは | 度も囲碁に触れていないらしい・・・

「囲碁の使い道は、やっぱり遊びだったなぁ」と、彼は笑って言った。

そう聞いてから、僕は友人にとって囲碁は将来に役に立たないものだったのだと思った。親の言うとおり無駄だったのだろう。

それから僕は人にそれはしても無駄だよなどと言わないように気をつけた。

なぜなら、無駄か無駄でないかは自分自身が決めること、あるいは自分自身の経験によって導き出されるものだからだ。

僕と友人のように、はじめは二人にとって囲碁は価値を持たなかった。

しかし僕はそれでコミュニケーションが取れると言う価値を見出した。

対して、友人は価値を見出せず未だ価値は無いままだ。逆に考えるとこれから彼の人生の中で囲碁が意味を持ったならば、無駄にはならないのだ。

このように無駄だと決めつけることができるのは、その人が死ぬ時だろう。

僕が思うに、親が囲碁をとりあげる行為に及んだのは、自分にとって囲碁が無駄で必要のないものだと言う価値 観や経験を僕たちに押し付けたのだろう。 だけど、それは悪気があって行ったことではなく、親は親の価値観の中で物事を判断し伝えたのだ。 それを知ったからこそ、僕は子供にいつもこういう

「人が生きていく中ですることに無駄なことってあると思う?

本当はね、誰もわからないんだよ。

わかるのは僕たちが大きくなって死んでしまう直前かもしれない。

だから、どれが無駄で無駄でないものなのかなんて実はそんなものないんだよ。

だからこそ、君たちは今自分に何が必要なのか考えて、必要なものを取り入れて行動するんだ。

その上でしたいことをすれば良い。

それが人生で無駄か無駄でないかは誰もわからないから、咎めも止めもしない。

死ぬ前しかわからないことを考えて歩みを止めるのではなく、自分が必要だと思うことに時間をかけて取り組むんだよ」

۲

#### 追記

これを見たあなたは今何が必要だと思いますか?

それが周りから無駄だと言われようと続けてください。一度本当に無駄ではないか吟味する必要はありますが自分にとって大切なものなら、その意思を尊重してください。

無駄と言ったのは、その人の経験上の話であって、あなたの人生に関係は無いですから。

本当にそれが無駄だったのかは、死ぬ前に振り返って

そして、何一つ無駄のない、そして物事に価値を見出せるような素敵な人生を送ってください

おしまい 🍀

## ここはカムパチョスの街だ。手にリンゴをもった私に神はこう言った。 「そのリンゴを私にください。」

この不思議な書き出しから始まる様々な物語をそれぞれが考えました。 個性豊かな展開をお楽しみください。

### NO. 1

ここはカムパチョスの町だ。

手にリンゴを持った私に神はこういった。【そのリンゴを私にください】

私は神と名乗る人物に手に持っていたリンゴをあげた。

すると神と名乗る人物の口からこんな言葉が、、

Г---、----。л

すると私の体は謎の白い光に包まれた。

目を覚ますと自分の部屋だった。

てっきり夢だと思った私は会社に行こうと考えた。鏡を見るまではーーー。

鏡の中の"自分"は、もう一人の誰かのようだった。

髪が短くなっている。目線が低い。

何より――顔が幼い。

「、、、は?、、、」

鏡に手を伸ばすと、そこに映る小さな手が、ぴたりと重なった。

頬を触る。ぷにぷにしてる。

声を出すと、それも高くて、あどけない。

「うそ、なんで、、子どもになってるの?」

戸惑っていると、テーブルの上のスマホが鳴った。画面を見て、息をのむ。

【おかあさん】

見慣れた名前。でも、おかしい。

母はもう何年も前に亡くなったはず――

震える手で通話ボタンを押す。

「、、、もしもし?、、、」

『ーー? どこ行ってたの、早く学校の準備しなさい!ランドセルにお弁当入れておいたわよ!』

ランドセル、、? 弁当、、、?

え、学校って、小学校の、、、?

「、、あのさ、、私って何歳?」

『なに寝ぼけたこと言ってるの。8 歳でしょう?』

頭の中が真っ白になった。

夢じゃないの? いや、さっきまで会社行こうとしてたんだよ?

なのになんで子供に?

そのとき、ふと、机の上に置かれていたノートに目が止まる。

そこに、見覚えのある字でこう書かれていた。

【そのリンゴは、"時間"を食べた】

、、あのスーパーで売ってたリンゴ、、、

あれを神に渡したとき、私の"時間"が削られた?いやでもよくある転生者のように復讐することなんかない。なんで私が、、?

ポケットに違和感があり、手を突っ込むとあのリンゴの欠片と小さな紙切れがあった。その瞬間かすかに声が聞こえた気がした。

『この時間で、君は何をやり直す?』

その声を聞いた瞬間、私はなぜか、泣きそうになった。

小さな紙切れを開くと、

『君にはやるべきことがある。時間はまだある。やりなおしたかったらリンゴを触るんだ。がんばれ』

思い出せないけどーー

"やり直さなくちゃいけないこと"が、きっとあるんだろうな。

そして私は、小さな靴を履き、玄関を開けた。

そこには、あの日失ったはずの懐かしい町と、母の声が響く朝があった。

### *NO.2*

ここはカムバチョスの街だ。手にリンゴをもった私に神はこう言った。

「そのリンゴを私にください」

「え…嫌ですけど」

自信満々に、絢爛豪華に現れた神に私はこう言った。

高々と私に向かって差し出した手に、リンゴのかわりにキャンディの空袋を乗せる。

「…え?」

神は信じられないといった様子で戸惑う。それはそうだ。見ず知らずの他人に易々と私物をあげるのは流石の私でも気が引ける。

「…あのねぇ、今の時代そんなことしてたら不審者に思われるよ。…というか、なんでりんごなの?」

理由を聞こうとしても、神は押し黙ったまま動かない。 激怒に圧伏させたかのように、わなわなと両手を震わせた。

「あのー…。大丈夫?そんなにも私が育てたリンゴが欲しいの?」

神といえば人知を超えた絶対的な存在。一般農家が簡単に出会ってはいけないのである。

それなのにこの神は私よりも背が小さく、幼い。中学生ぐらいの子かな?と最初は思ったほどだ。

流石に意地悪しすぎたか。もしかしたらこの子は本当に神であり、ひょいと腕を振るだけで天変地異を起こしてしまうかもしれないのに。

そう思っていると、神は突然手の上の空袋を握りしめた。

グシャ、とプラスチックの無機質な音が響き、空袋は粉々になって宙を舞う。

ひらひらと風に乗って散らばっていく破片が、そっとリンゴの頭を撫でた。

すると突然、空気がビリビリと震え、地面が振動し始める。

おやおや本当に怒らせてしまった なんて呑気に考えていると、神は突然

「うぅぅ・・、えぐっえぐっ…なんで…くれないの!」 「は、はぁ…?どうして泣くの?一応神でしょ?」

「一応ってなんなの、一応って!私は正真正銘の神だもん!」

さらに地響きが強くなり、神を怒らせてしまった事がわかる。

…これ以上土地を荒らされると、私の農地まで荒れてしまうかもしれない。

それはまずい。畑は農家にとって命のようなものだ。

それこそ\_\_\_\_

「ねぇ、そんなことしてたら君が欲しがっていたこのリンゴももう育たなくなるかもしれないよ?だから、ね?一回落ち着こう」

私は彼女の顔を覗き込むようにして言った。

乱れた髪の間から鮮やかな翠緑の瞳が煌めいた。その人間とは思えない宝石のような瞳に、私は胸を打たれる。 神はぽつぽつの哀愁の露を落とし、湿った口調で言った。

「…うう…私もそのリンゴ、食べたかった…!いつも美味しそうだなって思ってたの!」

さすがは神だ。センスがある。うちのリンゴは街でも一番人気で、販売した途端にすぐ売り切れる。

このリンゴは、亡くなった父が私に託してくれた農地で育てたものだ。

その分の歴史や愛情と言った目で見えない何かがあるのか、街の人は毎年このリンゴを楽しみにしてくれている。 だから売れ残ることなんてことは滅多になく、今日たまたまリンゴを持っていたのは自分への差し入れ用だった。 半分は自分で食べて、もう半分は父に供えよう。今年も人気だったよ…なんて言ったら満足そうにしながら頷くの かな。

\_\_\_\_でもきっと、この神を無視してリンゴを供えることを父は許してくれないだろう。

それはそうだ。目先の困っている人を差し置いて何が農家なのだろうか。

私は\_私達はこの街のいわば『根幹』。食の幸せだけではなく、暮らしそのものの幸せを届けるのである。 かつて父は幼い私に向かって言い放った。

その言葉の真意にようやく気づけた気がした。

私は片膝をついてしゃがむと、リンゴを握りながら言う。

「…さっきは、いじわるしちゃってごめんね?とりあえずうちに来なよ。 おいしいリンゴ、食べさせてあげるから」

神の顔を濡らしていた涙を指で払い、そうして落ちた雫が陽光を反射して輝く。

さっきまでの悲しそうな表情がみるみるうちに元気いっぱいの笑顔に変わる。

まだ目と鼻に微かな赤みが灯っている。でも、さっきの寂しそうな顔に比べたらとっても明るく、可愛らしい。

これが本当に神なのかなぁ、と少し疑問に思ってしまうが、そんな神でもお腹を空かして街へ降りてくるっていうのは、なんだかおもしろい。

人間だろうが、神だろうが\_\_\_\_リンゴが好きなのか、嫌いなのか、生きているのか、死んでいるのかなんて関係なく見れるこの表情、私は大好きなのである。

### **NO.3**

ここはカムパチョスの街だ。手にリンゴをもった私に神はこう言った。

「そのリンゴを私にください」

「どうしてです?あなたは別に食べ物に困っているわけではなさそうですが」

私はそういった。目の前の人間は、

「君、私が神だってわかってるのかい?」

そんなふざけたことを言ってきたような気がする。会社で疲れていて面倒くさかったのでちゃんと聞いていなかった。

「あんたが神だろうが人間だろうがアメーバだろうが俺にとっちゃどうでもいいんだよ。俺に用がないならさっさと どこかに行ってくれ」

日頃から怒りや不満が溜まっていたので少し強く言ってやった。

「ひどい言われようだな。私が神だって信じてないからそんなひどい言葉がスラスラと出て来ちゃうんだよ。もっと一生懸命信じないと。私が神だって」

その後も何たらこ~たらよく分からないことを喋っていた。うるさかったのでほとんど聞いていなかった。

「それで、あんたが神様なら何しに来たんだよ。

リンゴをくださいとかそんなことが目的なわけじゃないだろ」俺がそう言って急かしてやると自称神様は

「そうだね。そろそろ本題に入ろう。君は人類が皆消えてしまって君だけ生き残ったとしたらどうする?」とよく分からないことを聞いてきた。なので

「人類が皆消えて俺だけ生き残るとかいう天文学的な確率が起こってから考えるよ」

そう言って適当に終わらそうとした。すると何故かやけに真剣に

「そうか」とだけ言ってどこかに行ってしまった。その後のことはほとんど何も覚えて居ない。家に帰って、風呂に入って、気絶するように眠ったと思う。次の日の朝、いつものように悪夢と共に目覚め、会社に向かう準備をしていたときだった。急に閃光のように眩しい光が地球を覆った。失明しそうなほどに眩しかったので目を瞑ろうかと考えている間に、男の声が聞こえた。

「私は神である。私は今すべての人類に語りかけている。本日めでたいことに最初の人類が誕生してから 800 万年がたった。私は神としてそれを祝うことにした。だがお前達が何を欲しているのか、何をしたいのかなど私は知らん。そこで、お前達全員がそれぞれ一つ願いごとをし、その中で最も多かった願いを一つ叶えることにした。期限は3日後の正午、そこで即願いを叶えてやる。

これを信じるかどうかはお前達の好きにすれば良い」

そう言って神とやらは消えていった。それから、何秒か思考が停止していた。神とやらの声が昨日の自称神様と一緒だったこと、もしかしたら本当に神なのか?という疑問、目が痛くて涙が出そうなのを我慢したことなど情報処理に頭が追いつかなかった。それから電車に乗って会社へ行った。会社へ向かう途中、いろいろなところでさっきの神とやらの話をしていた。それは会社でも変わらなかった。皆、何の願いを叶えてもらうかの話をしていた。私は馬鹿しいと思ったので、

自分の仕事をさっさと終わらせてしまい家に帰ろうとした。すると目の前に神が現れて

「それで、君はどうするんだい?世界で人間が君だけになってしまったら」

「どうしてそんなことを私にきくんだ?」

「なんとなくだよ。」

「そうかい。私はたぶん自分も死ぬ。それで人類はいなくなって終わりにするよ。」神は理由を聞いてきた。 「どうして?」

「別に普通だろ。私はそんなに人類に興味がないんだ」私がそう言うと神はまた

「そうか」とだけ言ってどこかに行った。それからは神に合わなかった。会社にも行かなかった。世界中で戦争が起こった。皆、自分の願いを叶えるために自分以外のものを武力で従わせようとした。すぐに核も使われた。限度がなかった。3 日目の正午の少し前、もう一度神が私の前にきた。「さて、意見は変わったかい?」私はいった「変わらない。」神は「もし君に神の力があったとしても?」

「それでもだ。今滅びなくてもどうせいつか戦争で勝手に滅びてる。」そんなことを神と話しているうちに、正午になった。神は世界に向けていった。

「人類どもよ。願いはなんだ。」そう言ってから数秒後、人類は滅びた。人々が願ったのだろう。あの国の人間に死んでほしい、あいつに死んでほしい、戦争によってそう願う人間が増えたのだろう。神は生き残っていた私に聞いてきた。

「それで君はどうするんだい?」私は

「またその質問か。私は死ぬ。それは変わらない。」神は最後に

「君なら人類を生き残らせると思ったんだけどね。」

そういった気がした。そうして私は死んで、人類は滅びた。

### *NO.4*

ここはカムパチョスの街だ。手にリンゴをもった私に神はこういった。

「そのリンゴをわたしにください」と。

そして、ぼくはかじりかけのリンゴを長身の神に手渡す。

神は一言だけ感謝を述べ、リンゴをむさぼり食う。その姿はなんとも神とは言い難い、、、そんな姿だった。しかし、そんな神とは言い難い姿でもこんなにも美しいのは神だからこそなのか、蒼白く儚く美しい、、、。ぼくはそうおもいながら自分の荒れた唇をキュッと噛み締めた。なんだか恥ずかしくなり、ニキビがおおく赤く腫れている頬をさらに赤くさせた。

いつのまにか神はリンゴを食べて、ぼくの方をみつめていた。ぼくはハッとし神と目をあわせる。目があったことを確認すると神は話し始めた。

「ありがとう。君のおかげでたすかりました。明日またここで会いましょう。そのときこのリンゴのお礼をさせてほしい。」と。

血色がある、、ふとぼくはあの異様な青白さはしんどかったのだと気付いた。

あなたがたすかったのならよかったです。とぼくはそう一言、不審に思われないようにこう答えた。

つぎの朝ぼくはとび起きた。そして心臓が爆発しそうになるほどそんなはやさでぼくは走った。なぜか行かねばならない、会わねばならない。そんな感覚がぼくを襲った。気がついたら昨日のあの場所にきていた。ぼくと神だけの、、、、栄えているカムパチョスの街とは思えない、静かでうつくしいあの場所。

そして、そこに大量のリンゴにかこまれた神がいた。、、、なぜそんなにもリンゴがあるのか不思議だった。そしてそれを問う。神様は質問にこたえずに昨日のリンゴのお礼です。とだけ答えた。、、、それ以上はきけなかった。聞いてはいけないようなそんな気がしたからだ。

ふとぼくはポケットにいれていたブルーベリーを手渡した。

神はよろこんだ。ぼくは新しいたべものを神がよろこんでくれてよかったとだけそう思った。

神はブルーベリーをたべ、そのよこでぼくは神からもらったリンゴをたべる。このとき神とすこし距離が縮まった気がしなんともいえない甘酸っぱい感情をもち、他愛のない話をした。日が暮れるまでずっと。

あたりが暗くなったので、別れが惜しいなと思いながらぼくはたちあがる。そんなぼくの気持ちが伝染したのか、はたまたぼくを気遣ったのか、神はこういった。

「また明日もきてくれますか。」と。ぼくはそれがとても嬉しくてうれしくて間を空けずにこたえる。もちろんです。と。 そして、ぼくは本来の居場所へともどる。

この眠れない気持ちをどうしようといままでにはない楽しい悩みを抱えた。そうこう考えるうちに眠りについてしまった。

いつもは身体をうごかさないようにしているぼくだが、2日も早起きしてしまった。ごはんはどうしよう、そんな不安が よぎったが神にあうとそんな悩みもふきとんだ。神が一緒にいるのなら死んでも悔いはない。本気でそう思った。な ぜだか、今日あうとこれ以上あえない、そんな気がしてならなかった。

それにぼくの勘はよくあたる。おかあさんが自殺したように、飼い猫のミケがしらないおじさんにころされてしまったときも、なんとなく会えない。そんな気がしていた。

ぼくは最後にこうぶつのピスタチオを手渡した。なぜか神がおおきくくちをひらい、、。

気づいたら、ぼくは神の身にはいっていた。いやたぶん。そしてすこし見下ろすとすべて把握した。ぼくの前にはぼくがいる。これは現実にはありえないことだ。だって。この街は内陸国で水場もない、ぼくが反射したと考えるにはあまりにも無理がある。そして、ぼくはここですぐさま自分が神になったことに気づく。そして神ならざる、ぼくならざるものはこう言う。あなたがあか、あお、みどりという"はじまりのいろ"をくれてたすかりました。これでようやく解放されます。ありがとう"神"。と。そう答えて神だった、、、、いや神ではないものは去っていった。なんとも歪なはしりかたで。

ぼくは神になった。神の美しさにあこがれていたはずなのに、おのれの醜さに嫌悪していたはずなのにちっともうれ しくない。あのときの静かでうつくしい森、神との他愛のない会話を思い出す。ふと涙がこぼれた。そこから涙がとま らなく、ずっと泣いた。朝から夜まで、I日こえて2日、、、、それをくりかえし、透明な涙がかれはて神であるぼくはいな くなってしまった。巨大な湖となって。

### *NO.5*

ここはカムパチョスの街だ。手にリンゴをもった私に神はこう言った。「そのリンゴを私にください」

数時間前、私は久々に友人に会うため妻と一緒に彼の住む街へ向かった。私たち3人は大学時代からの付き合いで卒業してからも定期的に遊んだり飲みに行ったりしていたが最近は彼の都合が悪く中々会えていなかったのだ。

彼の家に着き、中に入ると少し雰囲気の変わった彼が立っていた。私は久々の再会に喜びつつ部屋に進んだ。彼がお茶を入れにいっている間懐かしい部屋を見渡していると以前はなかった香水などを見つけた。彼女でもできたのかと思い、戻ってきた彼に聞いてみると少し動揺した様子で「ど、どうだろうね」と返されたので気になって言及したがはぐらかされてしまい、妻にも「きっと恥ずかしいのよ、もうやめてあげましょう?」と言われたので仕方なく諦めた。

私たちは最近の話や昔の思い出話に花を咲かせ、気づくと日が沈んでいた。明日は朝早くから仕事なのでそろそろ帰ることにし、別れを告げようとすると彼が「これ親戚がくれたんだけど | 人じゃ食べ切れないから」とりんごをくれた。私と妻は礼をし、別れを告げ、帰路に立った。

数分経つとどこからか現れた男が「そのリンゴをください」と話しかけてきた。私は突然のことに驚きつつも「なぜです?何かお困りですか?」と言うと男は「私は神です。そのリンゴを渡さなければあなたは後悔することになる」と言った。私が男の意味のわからない言葉に混乱していると妻に「きっとただの変な人よ。無視して早く行きましょう」と言い歩き出したので、私も無視して歩き出した。

家に着くと、お腹が空いていたので友人からもらったリンゴを切って食べることにした。そして、リンゴを切り妻と食べようと妻を呼ぶと「私は夕飯の準備をするから後でいいわ」と言ったので「せっかく切ったんだし準備は後にして先に食べないか?」と言ったが「私はいいわ」と少し怒った様子で言われてしまったので、I人で食べることにした。リンゴを食べると急に息が苦しくなり、私は意識を失った。

私が目を覚ますとさっきの男が空に浮かび、私を哀れみの目で見つめていた。

### NO.6

ここはカムパチョスの街だ。手にリンゴをもった私に神はこう言った。 『そのリンゴを私にください』

勤務先のレストランの買い出しの帰り道。

りんごを手に歩いているとムスクの匂いがする高貴な男に声をかけられた。 『そのりんごを私にください』

なんなんだ。高そうなコートを着ているのに物乞いか?というかこいつは誰だ。

「あなた誰ですか」

『私ですか?私は神です。』

神…?訳が分からない。

「あなたは誰ですかと聞いているんです」

『だから神だと言っているでしょう?』

どうやら私は変な奴に絡まれたようだ。ああ、面倒くさい。

「今仕事中なんです。用事がないならさっさとどいてくれませんか。」

『用事ならありますよ、あなたの持っているりんごを私にください。』

本当に話が通じない奴だ。もういっそりんごを渡してしまおうか..... でも、なんで私なのだろう。

「あの、りんごくらい買えばいいじゃないですか。なんでわざわざ私のをねだるんですか。」

『あなたのりんごがいいんです。あなたのでないと駄目なんです。』

本当に頭のおかしい奴じゃないか...

さっさとりんごを渡してしまおう。渡しさえすればこいつも引き下がるだろう。

葛藤の末、りんごを渡した。奴は顔を赤く染めて目に涙を浮かべて喜んだ。 去り際にウインクまでしてきやがった。本当に気味が悪い。

頼まれていたりんごを持ち帰れなかった私は、店のオーナーに少し叱られた。 例の男にりんごを渡したあの日から、私は四六時中視線を感じるようになった。 店で働いているとき、買い出しに行くとき、勤務が終わって家から帰るとき、 霊感でも目覚めたのか?いいやそんなことありえない。

自宅に到着し、鍵穴に鍵を刺した。鍵を開けようとしたが空回りした。 鍵が開いている...?今朝ちゃんと閉めたはずなのに。 すこし不気味さを感じながらリビングに進むと、ローテーブルに手紙が置いてあった。

"先日は愛のこもった告白をありがとう♡ とっても嬉しくて帰ってからも何度も告白の瞬間を思い出したよ♡

僕達恋人になったから一緒に住まないと、と思って君のお家を下見させてもらったよ。

<sup>&</sup>quot;愛しいハニーへ"

結論から言うと、僕達は新しい家を探したほうがいいと思う... 正直この家はセキュリティがとても緩いよね?それに狭いし... こんな危険なところに君を住まわせておくのは不安だよ...二人で相談して不動産屋にいこうね。

あ、それはそうとせっかく恋人になったんだからデートもしたいよね??? ベタに水族館もいいし、ピクニックも........(以下略)"

最近感じていた視線の正体はストーカーだった。 した覚えのない告白と、実現してほしくない未来計画が綴られている。 お家を下見って…まだ家に居たりして。 そういえば家に帰ってきたときから違和感がある。 この甘ったるくて胃もたれしそうな匂い…

|人だけ心当たりがあった。

まだストーカーが家にいるなら、隠れる場所はおおよそクローゼットだろう。 キッチンにあった果物用ナイフを片手に持ち、意を決してクローゼットを開けた。

そこに居たのは"神"だった。

ナイフ片手に立ち尽くす私と体育座りの神。 長過ぎる一瞬の末、先に言葉を発したのは私だ。

「警察、呼びますね。」

『神である僕が警察なんかに捕まると思うかい?君が、告白してくれたのに…』

手紙の主はこいつで確定のようだ。

「告白ってなんですか」 『僕にりんごをくれたでしょう?』

それが告白とでも言うのか。りんごをあげただけで?

『りんごの花言葉はね、"選ばれた恋"なんだよ』 『僕のことを選んでくれてありがとう。』

ストーカーもとい神は見惚れるような笑みを浮かべた。 それからのことは正直覚えていない。

あの時、りんごを渡さなければ、こんなことにはならなかったのだろうか。

### *NO.7*

ここはカムパチョスの街だ。 手にリンゴを持った私に、神はこう言った。 「そのリンゴを、私に下さい」 -----どうしてこうなった。

今日は、普通の日だった。 私は…まぁ、名はいいだろう。 私は、ある者から逃げ続けていた。 だが、私はその《ある者》に会ったことはない。

私は不思議な子供で、生まれた瞬間から自我があった。

自我、というよりも、ただ漠然とした一つの使命、あるいは強い意識、だろうか。

だから、私は逃げた。隠れた。本能に刻まれた、《ある者》への恐怖から。

恐怖というより、畏怖と言ったほうが正しいかもしれない。

とにかく、私は逃げなければならなかった。

隠れなければ、ならなかったのだ。

そうして、名も知らぬなにかから逃げ続け、私はある街に住みだした。

なんてことはない、普通の街だった。

他と違うところといえば、自然が豊かなところだろうか。

木があって、森があって、動物たちがいて、たくさんの果物が実っていた。

この自然が、どこか私に懐かしさを感じさせた。

だからこの、カパ・・・いや、カムチョ・・・・・あぁそう、カムパチョスとかいう街に住んだのだ。

見るところと言えば、その自然くらいしかなかったのだが、それでも、私に目的を忘れさせるくらいには、魅力的な街であった。

だから気が緩んで、ついつい痕跡を消し忘れたようだ。私は見つかってしまった。

私が逃げ続けてきた、その存在に。

その人(いや、人ではない。そもそも、姿が認識できない。かと思えば、犬にも人にも魚にも見える。とにかく異質な存在だ)を見た途端に、私は理解した。こいつだ。私は、こいつから逃げていたのだ。瞬間に感情が塗り潰される。 恐怖と、畏れと、罪悪感とこれは…憎しみ?何故だ。こいつが憎い。

戸惑いのため動けなくなった私に、そいつ…もとい、神は言った。

「そのリンゴを、私に下さい」

.....リンゴ?

何のことだかわからない。

しかしその瞬間、私の右手が動いた。見るとそこには、真っ赤なリンゴがあった。

すぐに腕が引かれる。

私は咄嗟に、腕を引き戻した。何故かはわからない。だが、これを取られてはいけない。

これを渡してしまえば、私は………

「渡して下さい」

嫌だ。駄目だ。渡せない。これは、渡してはならないんだ。

急に溢れ出した感情に、涙が零れ落ちていく。

その水滴に、少女が笑っているのが映っていた。

私と同じ位の、おそろしく美しい少女だった。知らない。でも、どこか懐かしい・・・

「今回も、渡してはくれないのですね。……我が愛し子、アダムよ」

神が言った。

その声には、悲しみの色が感じられた。

「何故ですか。私はあなたを愛している。だから、やり直しの機会を与えようとしているのですよ。それを、何故拒むのです。

何故か?それは、だって・・・

「…イヴには、会えませんよ」

イヴ?そうだ。イヴはどこだ?もう一度、イヴに会いたい。

「渡さないのなら、私は今回も引きます。ですが、諦めるつもりはありません」

そんなことはいい。イヴはどこだ。

「あなたは楽園を、世界を捨て、イヴを選んだ。それを、青めるつもりはありません」

「あなたが私を、世界を愛してくれるまで、何度でも会いに来ます。あぁ、だからアダムよ、決してこれ以上、罪を重ねることのないようにしなさい。あなたは、イヴには会えないのだから」

嘘だ。イヴには会える。存在する限り、私たちは惹かれ合うのだから。

「それでは、あなたを輪廻に戻します。さようなら、91代目アダムよ。次に会う時、きっとそれを渡してくれることを、 期待しています」

「園に、帰ってきて下さい」

嫌だ。嫌だ。待ってくれ。まだ、イヴに会えていない。私たちはもう一度、二人で・・・

薄れゆく意識の中、私は思いを馳せた。 たった一人の少女に。愛する妹、対となる私自身に。 いつかもう一度、再び会えるのを信じて。

目を覚ますと、僕は赤子だった。

赤子なのに自我がある。不思議だ。

でも、そんなことがどうでもよくなる位に、強い意識がある。望みがある。

園には帰れない。あれと一緒には、帰れない。まだ、XXに会えていないから。

XXと一緒に、やり直すんだ。二人で……二人?

やり直す?誰と?何を?

あれ?何をしてたんだっけ。

僕は…何だった?

······

逃げないと。逃げないといけない。恐ろしいなにかから。

忘却の中に沈んだ赤子は、赤い果実を握りしめていた。

### NO.8

ここはカムパチョスの町だ。手にリンゴを持った私に神はこう言った。

「そのリンゴを私にください。」

カムパチョスの町は、俗に言うスラムである。そこで私は身寄りのない6人のチビ共と一緒に暮らしている。

今日の収穫はリンゴ I つだけであった。これだけではチビ共の腹を満たすことなどできないが、無いよりはマシだ。家に帰る途中、町の中心部を歩いている時、視界を何かが遮ったと同時に額に痛みが走った。

高い悲痛の声が聞こえた後、ドスンと足元に何かが落ちた音がした。痛みで閉じた目を開き足元を見る。そこには、神がいた。私の顔ほどしか無い小さな子供の姿をした神だ。いや、正確には神と書かれた名札を首から下げた子供がいた。その子供は唸り声をあげた後、目にいっぱいの涙を浮かべて困惑している私の方を見た。じっと私を見つめた後、何かに気づいたような顔をして両手を私に差し出した。そして涙声でこう言った。

「そのリンゴを私にください。」

「・・・・・は?」

訳が分からない。この子供はなんて図々しいのだろう。この町で生きる者にとってリンゴ I つがどれほど重要なものなのかこの子供は理解しているのだろうか、いや服装からしてもコチラの世界とは無縁の子供なのだろう。しかし、私は目の前で泣いてる子供を無視できないバカな男だ。

「…構わないよ。腹空かしてるならこれを食うといい。」

リンゴを渡すと子供は目を輝かせた。しかしそのリンゴを食べることなくただじっと見つめていた。しばらく見つめた後、子供はリンゴを持って浮いた。

۲۰۰۰--۱۲۱

そう、浮いたのだ。そして子供の手から突然光が溢れ出す。その光はあっという間に辺りを包み込んだ。光が消えるとそこには巨大なリンゴの木が生えていた。意味が分からない。あの子供は神か何かなのだろうか。不意にあの子供が下げていた名札を思い出す。もしかしたらあの名札の通りなのかもしれない。

「気に入ってくれましたか?」

目の前のリンゴの木に隠れていた神が顔を見せる。

「気に入ったも何もこれは一体・・・」

「お礼です!リンゴくれましたので。」

食い気味に神はそう言った。

「でも、リンゴの木を生やせるなら渡す必要なかったんじゃ。」

「いやいや、私は未熟な神なので元になるものが無いと創造することができないんです。なので、貴方が心優しい 方で本当に良かったです!有難うございます!!」

いつの間にか神の涙は引いていて満面の笑みで何度も私にお礼を言った。

「いやなんでリンゴの木なんて生やそうと思ったんだよ。」

「え?なんでって、そういう気分だったからってだけですけど。」

神は心底不思議そうな表情をして私を見つめている。

「私、そろそろ行きますね。あっ!そのリンゴの木お礼ですから受け取ってくださいね!」

巨大なリンゴの木を残して神は何処かに消えてしまった。私はできるだけ多くのリンゴの実を取って家に帰った。 家に帰るとチビ共が私が抱えているリンゴを見て驚きと喜びが混ざった顔をして駆け寄ってきた。たった I つしかなかったリンゴがあの神に出会って今はここに居る全員が腹いっぱいになれるほどに増えた。神はただの気まぐれで私達の生死を揺るがす。しかも自覚がない。これほど恐ろしいことは無いだろう。 それから少し後のこと、町の中心に生えた巨大なリンゴの木は街で暮らすすべての人々を潤した。神の創造物だからなのか、環境的にリンゴが育たないこの町でも巨大なリンゴの木は多くの実をつけている。そのこともありこの町はリンゴの名産地として少しずつ活気づいていっている。

### NO.9

ここはカムパチョスの街だ。

手にリンゴを持った私に、神はこう言った。

「そのリンゴを、私にください」

そう言ったどこかで見たことのある老爺に、私はなんと返したのだっけ。

• • • • • •

ジリリリリ、と耳を劈くような目覚ましの音でミオは目が覚めた。

眩しい光がカーテンの隙間から射し込み、目の奥を焼く。寝坊だ、完全に寝坊している。

バタバタと階段を駆け下り、リビングのドアを開けた瞬間、家族が首をグルンッと一斉に首をこちらに向けた。

その目に、一瞬だけ感情の影が宿った気がした。けれど次の瞬間には、いつものようにそれぞれの動作に戻っていた。

父は新聞を開き、母はキッチンへ戻り、弟は無言でパンを齧っている。

……なんだろう。音がしない。

新聞の紙が擦れる音も、食器の音も、何もかもが聞こえなかった。けれど、動きはある。

音を消された映画を見ているようだった。

「起こしてくれても良かったのに」と喉まで出かけた言葉を飲み込む。

ミオには何故か、今は話しかけてはいけない気がした。

そのとき、机の上のリンゴが視界に入った。

「ねえ、これ……このリンゴ、昨日赤かったよね?」

思わず母に聞く。

「何言ってるの。ずっと青いままよ?」

母は笑いながらも、目を合わせてこない。笑い声が、やけに乾いて響く。

弟も同じように、こちらをチラリと見たあと、首を小さく振った。

(……おかしい)

ミオの記憶違いだろうか。でもあのリンゴは、昨晩、弟が「もう食べてもいい?」と聞いてきたはず。

そのときは確かに、鮮やかな赤だった。

なのに、今この青さ。

しかし出社時間も差し迫っていて、ミオはただの勘違いだと思って慌ててドアを出た。

だって、どう見てもリンゴは青かったのだから。

ミオにとってその日は厄日だった。

仕事では沢山ミスをするし、背にずっと貼り付いた違和感から逃げたくて同僚とご飯に行っても気が紛れることはなかった。いつもの職場なのに自分の居場所が無いように感じられて、体調不良ということで昼に早退までした。 帰らなきゃ。帰ろう。帰ろう。

そう呟きながら、交差点の人波をかき分ける。

波を越えて、越えて、越えて……越えた先で、私は気づいた。

そうだ、おかしい。昼時に、こんなに人がいるはずがない。

ここは、朝は通勤のサラリーマンでいっぱいになるけど、昼を過ぎれば閑散として、がらんどうになるはずなのに。 恐怖で頭が真っ白になった。

人はたくさんいるのに、誰の顔も見えない。

誰もこちらを見ていないようで、でも確かに、ミオのことを見ている気がする。

みんながおかしくなったのか。

それとも、私だけがおかしくなったのか。

わからないまま、体の震えが絶頂を迎え、腰が抜けそうになった――そのときだった。

「そこのお嬢さん、ちょっと良いですか」

どうしようもなくて、背に腹はかえられなくて、振り返った。

そこに立っていたのは、どこかで見たことのある老人だった。

その手には、真っ青なりんご。

そして、老人は笑って言った。

「今度はあなたが、食べてください」

### NO.10

ここはカムパチョスの街だ。

手にリンゴを持った私に神はこう言った。

「そのリンゴを私にください」

神を気の毒に思った私は、

「もちろんです。さぁどうぞ」

と答えた。すると神は、

「おお、なんと優しい人間なんでしょう。お礼と言ってはなんですが、あなたに魔法を与えましょう。いいですか?この魔法のカギとなるのは\_\_\_\_\_」

そんなこんなで私は、魔法使いとして生活するようになった。

と言っても、今までの生活とは殆ど変わらない。一つ違うのは、この魔法で街の住民たちの悩みを解決するようになったことだ。

家の修復、迷子の犬の捜索、インフラ整備など、様々なことを魔法を使い、解決した。

その噂を聞き、隣の街や近くの小国などから、依頼が届くようになった。 私は惜しみなく魔法を使い、皆に笑顔を届けた。

そのような活動を続けて数十年。今、このカムパチョスの街は

自然豊かで美しく、平和で穏やかな国となった。

国には笑顔が溢れ、全体が輝いているようだった。 国民は、この国を作った魔法使いを、「神」と呼び、敬愛した。 私は国民の期待に応えるため、さらに問題解決に力を入れた。

だがしかし、私は私が思っていた以上に年老いてしまった。 まだ魔法は使えるが、あと何年持つかはわからない。

この場所がずっと心の底から笑顔でいられるような国であるために、私は後継者を求め、 国を旅するようになった。

街の人に話しかけてみたり、ときには路頭に迷う人に扮装したりして、私の意志を継ぐのにふさわしい人を探した。 だがしかし、簡単には見つからなかった。

この国の人々は皆、とても優しい。だが、もう少しだけ足りないのだ。

魔法の発動条件が。

ある日、私がまた後継者を求めて国の辺境を訪問していると、そこで悪さばかりしているというごろつきに囲まれて しまった。

おそらく老人が一人であり、それなりに上等なマントを羽織っていたせいだろう。

彼らに殴られはしなかったが、交通に使う予定だったお金や食料、マントなどはすべて持っていかれてしまった。

私の魔法は自分に向けては発動させることができない。

お金がないため、馬車に乗ることも、宿に泊まることもできない。

朝早くに出発し、できる限り早く到着しようと昼食を食べずにここまで来たため、腹も空いてきた。

さて、どうしようかと思い、頭を悩ませていると、道でリンゴを売っていた少女が私の方に歩いて来てこう言った。

「なにか困ったことがあった?私になにかできることはある?おじいさんが困った顔をしていたら、私、さみしくなっちゃう。おじいさんには笑顔でいてもらいたいの!」

と。

私はその時、彼女の中で熱く燃え盛る金色の炎を見た。

彼女であれば、私の意志を継ぐことができる。

彼女であれば、今以上の素晴らしい国を作ることができる。

そう思った私は、彼女に向かってこう言った。

「では、あなたが先程売っていたリンゴをひとつくれませんか?」

と。

すると彼女はきょとんとした後、飛び切りの笑顔で「うん!!」 と答えたのだった。

このお話を最後まで読んでいただき、ありがとうございます。 今回私は、去年の作品と同じく、魔法を混ぜ込んだものを書かせていただきました。 前作とは違い、この物語では魔法とはなにか、ということをテーマにしました。

皆さんは魔法って何だと思いますか?

私は「少しでも多くの人を助けたい、笑顔にしたい」という想いから作られるものだと思います。 この想いによって、助け合い、思いやりの輪が広がり、更に多くの人が助かり、心の底から笑顔を浮かべることが できる社会になっていく。

そんな魔法、実はもう、あなたも使うことができます。

物語の主人公は理想が高かったため、他意がなく、本当に助けたいと思っていた純粋な少女にだけ魔法を教えました。

しかし、実は誰でも魔法使いになれるんです。

ぜひこのあとがきまで読んでくれたあなたも、周りの人たちの魔法使いとなって、笑顔の花を咲かせてみませんか?

### ¥0で今から読める!!

# なろう小説のすすめ

### なろう小説とは?

なろう小説とは小説投稿サイト「小説家になろう」に掲載されている作品の総称や異世界転生者などのいわゆるなろう系というジャンルの小説のことを指します。

アマチュア作家の投稿の場であるため若い人でも文体が 読みやすいだけでなく、なかには書籍化・アニメ化され ている人気作も…!

読み方はかんたん、数々の名だたる名作の原作が誰でも 無料で読めるWEBサイト「小説家になろう」。

ぜひみなさんもお手持ちの携帯で読んでみて下さい!

### こんな人におすすめ!

- ・忙しくて隙間時間に本を読みたい人
- ・気になる作品を無料で試し読みしたい人
- ・手軽に暇つぶしをしたい人

# おすすめの人気作

### 『転生したらスライムだった件』 作者:伏瀬

【あらすじ】

突然路上で通り魔に刺されて死んでしまった、37歳のサラリーマン。意識が戻って自分の身体を確かめたら、スライムになっていた!主人公リムルは転生時に身につけた強力なユニークスキルを駆使し、魔物たちが暮らす国家テンペストを築く。主人公と仲間の成長が描かれたこれぞなろう系と言える長編異世界転生ファンタジー!

#### 【感想・おすすめポイント】

「スライム」というユニークな設定や、登場キャラクターたち の深い人間性、そして戦略的で奥行きのあるストーリー展開が とにかく魅力的です。

ただのなろう系と侮るなかれ!物語は単なるバトル中心の内容だけではなく、リムルは国を築き上げていく中で様々な勢力と関係を持ち、時には対立し、時には協力しながら、国を発展させていきます。国家運営や外交、経済といった要素も絡むリアリティのある文章は読んでいるうちにその世界観にぐっと引き込まること間違いなし!

異世界のファンタジーでありながら現実世界の政治や戦略を見事に取り込んだ作品の展開の奥深さには圧巻されます。

書籍化・漫画化・アニメ化・映画化された超超有名人気作!! 私のおすすめは漫画で読むことですが、気になる方はぜひ WEB小説で試し読みを!

\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*\*

## 『薬屋のひとりごと』 作者:日向夏

### 【あらすじ】

薬草を取りに出かけたら、後宮の女官狩りに遭った主人公猫猫。 花街で薬師をやっていた猫猫は、後宮で下女となり、現状に不満 を抱きつつも奉公が明けるまでおとなしくしていようと思ってい た。しかし彼女の好奇心と知識はそうはさせず、ふとした事件を 解決したことから帝の寵妃や宦官の壬氏に目をつけられることに なる。

後宮に渦巻く陰謀や権力争い、そして猫猫と壬氏の関係性が絡み合い、物語は展開していく。

2023年アニメ化し大きな反響を呼び、原作小説のシリーズ累計発行部数は4000万部を突破!架空の中華風の帝国の後宮を舞台にした人気ミステリー小説!

### 【感想・おすすめポイント】

この作品の最大の魅力は心地よい爽快感を味わえる謎解きのストーリーにあります。難しすぎない謎と現実の法則と照らし合わせて理解できる解像度の高い構成であるため、幅広い層が満足できる展開となっています。ファンタジー推理小説ではあるもののほんの少しのラブコメ要素が入っている点もまた若い層、特に女性から人気を集めた理由となっています。

小説はもちろん漫画版も面白いですが、アニメ版のテンポの良い 謎解きの展開が万人受けすると思います。

ぜひWEB小説でもお楽しみ下さい!

# 『Re:ゼロから始める異世界生活』 作者: 鼠色猫/長月達平

### 【あらすじ】

異世界に召喚された高校生ナツキ・スバルが異世界で出会った少女エミリアを救うため、死ぬたびに時間が巻き戻る「死に戻り」の能力を使って、絶望的な状況を打破し過酷な運命に立ち向かうダークファンタジー物語。

### 【感想・おすすめポイント】

魅力的なキャラクターたちの個性、先の読めないストーリー 展開、そしてスバルを応援したくなるような感情移入度の高さ が人気を集める理由です。

アニメ番組公式サイトによると、「無知無能にして無力無謀と 四拍子欠けた主人公」と紹介されており暴走気味なところが確 かにありますが、自分を犠牲に周囲を助ける主人公らしさがあ ります。

死ぬという行為の肉体的、精神的つらさや何度も悲劇を味わ う苦しさから、きちんといろいろなことを考えて悩んで、解決 しようと最大限の努力し成長していく主人公の姿には思わず夢 中になってしまう人が多いです。

なろう系作品は主人公が無双して行くストーリーが特徴ですが、そんな主人公が無双状態で進んでいく話が苦手な人には特に強くおすすめしたい作品となっています。

書籍化や漫画化、アニメ化、そしてさらにはゲームにもリゼロは登場していますので、知っている人も多いと思いますが、ぜひ原作もチェックしてみて下さい。

### 『オーバーロード』作者:丸山くがね

#### 【あらすじ】

2138年、かつて一大ブームを巻き起こしたオンラインゲーム「ユグドラシル」のサービス終了が迫る。主人公のモモンガは、ギルド「アインズ・ウール・ゴウン」の本拠地である「ナザリック地下大墳墓」で、仲間との最後の時間を過ごしていた。しかしサービス終了時間を過ぎてもログアウトはできず、ゲームは異常な状態に陥った。

そしてゲーム内のNPCたちは自我を持ち、動き始め、ナザリックの外には見たこともない異世界が広がる。モモンガは、ゲーム内でのギルド名「アインズ・ウール・ゴウン」を名乗り、この異世界で名を轟かせることを決意する。

### 【感想・おすすめポイント】

元祖なろう系ともいえるなろう小説の代表作! しかし通常のファンタジーでいうところの勇者の宿敵・魔王 視点のお話となっています。魔王であり、主人公。王道ファ ンタジーへのアンチテーゼとも言える作品です。

また転スラの作者である伏瀬氏は過去にインタビューでオーバーロードに影響されて転スラを書いたと言う通り二つの作品には類似点も多く転スラを読んだことがある、面白くて好きという人にぜひおすすめしたい小説です。

これまで紹介した四作以外にもなろう小説には『君の膵臓を食べたい』『私の幸せな結婚』など知名度の高さに対してなるう系とは知らなかった!という人気作品が数多く存在します。今回の紹介で普段本を読まない人やなろう系という言葉にピンと来ない人、なんとなく忌避感を持つ方々に少しでも興味を持ってもらえたなら幸いです。

#### おすすめの本

### 『ニホンブンレツ』山田悠介

山田悠介さんの『ニホンブンレツ』は、日本が東西に分断されてしまう物語。主人公は離れ離れになった恋人を救うため、西日本へ命がけで潜入します。テンポが良く、最後までハラハラしっぱなしの物語です。

### 『十角館の殺人』綾辻行人

大学のミステリ研究会の七人が訪れたのは、孤島にある何もかもが十角形の奇妙な館。そこで連続殺人事件が学生たちを襲う。一方本土では元ミステリ研究会のメンバーに死んだはずの人物から手紙が届く。襲撃の一行が読者を待っている。映像化もした、綾辻行人の「館シリーズ」の第一作目。

### 『アリアドネの声』 井上真偽

見えない、聞こえない、話せない、三重の障害を抱えた女性が巨大地震で地下五階に閉じ込められた。彼女を救うためにはドローンで安全地帯まで誘導しなければならない。これは誰もが無理だと諦めてしまうような救出劇に挑む物語。ぜひどうしたら彼女をドローンー台で救うことができるか考えてから読んでみてください。